

本化の菩薩が選んだ国と時代

文◎村尾 泰孝

正しい法が隠没し、 末法という時代が訪れる

仏教の開祖といえ、もちろんそれは

お釈迦さまです。お釈迦さまはインドに王子としてお生まれになられました、十九歳で王位継承の立場をお捨てになられ、ご出家なさいます。その後、樂行六年苦行六年を経て、三十歳でお悟りを開かれました。

以降お釈迦さまは、八十歳でご入滅（にゆうめつ）されるまでの五十年間、半世紀という永きにわたって数多くの教えを説いてこられました。それらは八万法蔵、あるいは八万四千の法門とも呼ばれるほど、数多く伝わっているのです。

その中の一つ『大集経（だいじつきよ）』第五十五巻の月蔵分（がつぞうぶ

ん）という部分には、お釈迦さまがご入滅の後の仏法の消長、利益（りやく）の変遷（へんせん）について「五箇（ご）かの五百歳」を予言として挙げ、説き明かされています。

先ず始めの五百年を「解脱堅固（げだつけんご）」といいます。この時代は仏法が非常に盛んで、智慧を得て悟りを開く者が、非常に多い時代です。

第二は「禪定堅固（ぜんじょうけんご）」で、禪定を保つものが多く、仏法が持続される時代です。

第三は「読誦多聞堅固（どくじゆたもんけんご）」。仏法を熱心に聞き、そして学ぶ者が多い時代です。しかしこの時代になると、仏法の実践というものが次第に衰（おとろ）えてくるのです。

そして第四が「多造塔寺堅固（たぞうとうじけんご）」で、寺院や堂塔等の建

造物を盛んに建立する時代、仏法が形骸化（けいがいか）する時代です。

最後に来るのが第五番目の「鬪諍堅固（とうじょうけんご）」。仏法は隠没（おんもつ）し、皆が自説に固執（こしゅう）して争いの絶えない時代です。

各々につく「堅固」という字には、お釈迦さまの未来記（予言）に間違いは無く、必ずそのような時代が到来するという意味があります。

お釈迦さま入滅の後、 世界はどう変わるか

一方でお釈迦さま滅後の時代は、三つの段階に分けることもできます。まず正法（しょうぼう）時代は、お釈迦さまの説かれた「教（きょう）」とそれを「行（ぎょう）」ずる者、そして悟りの「証（しょう）」が得られる時代です。次の像法（ぞうぼう）時代は「教」と「行」のみが存する時代。「像」には形という意味があります。最後の末法（まつぼう）時代は「教」のみしか存しない時代

です。

この正法・像法・末法の三時に、前述の「五箇の五百歳」を配当すれば、第一の解脱堅固時代と第二の禅定堅固時代、つまりお釈迦さま入滅後の千年は正法時代にあたります。

第三の読誦多聞堅固時代と第四の多造塔寺堅固時代を合わせた、さらに千年までは像法時代に、そして第五の鬪争堅固時代は末法時代にあたるわけです。

この末法思想、日本においては伝教大師最澄（さいちよう）の作とされる『末法灯明記（まっぼうとうみょうき）』によつて広められ、永承七年（一〇五二）から、末法の世に入ると考えられました。そして平安中期以降、武士の台頭で公家政治がくずれはじめ、戦乱や災害が続いたことが、人々の間に末法意識が一層広まることになったのです。

大混乱する社会情勢の中、 日蓮聖人は誕生された

承久（じょうきゅう）三年（一一二二）

一）、緊張関係を保っていた朝廷と鎌倉幕府の間で、ついに争乱が勃発（ぼつぱつ）しました。後鳥羽上皇（ごとばじょうこう）は、鎌倉幕府の成立で弱体化していた公家勢力の回復をはかるために、討幕の決意を固め挙兵（きよへい）しますが、上皇の呼びかけに応じた兵力は予期に反して少なく、幕府方の兵力十九万によつて、一カ月足らずの内に京都を占領されてしまいます。

争乱後、幕府は後鳥羽上皇を隠岐に、順徳（じゆんとく）上皇を佐渡に流罪。土御門（つちみかど）上皇は自ら進んで土佐に流され、後に阿波へ移り没します。幕府はさらに、朝廷監視のため「六波羅探題（ろくはらはらんだい）」を置くなど、権力を西国に対しても強化し、朝廷に対して幕府優位の体制を固めました。これが、いわゆる「承久の乱」です。まさに末法・鬪争堅固の様相を呈した時代でした。

この翌年の承久四年（一一二二）二月十六日（この年の四月に貞応と改元される）に、日蓮聖人は今の千葉県小湊（こ

みなと）の地に、漁師である父貫名次郎重忠（ぬきなじろうしげただ）、母梅菊（うめぎく）の子としてお生まれになりました。ご自身の生い立ちについて書かれたものを見ますと、「安房国海辺の旃陀羅（せんだら）が子也」「貧窮下賤（びんぐうげせん）の者と生まれ、旃陀羅が家より出でたり」「民の家より出でて頭を剃（そ）り袈裟（けさ）をきたり」「片海の海人が子也」等々と語られています。

日蓮聖人が生をうけられた地は、当時の京都を中心とする文化圏からは遠く離れた、東国の辺土でした。また、律令の刑法に定めるところでは「遠流（おんる）」の地でもありました。同年代に輩出された、鎌倉新仏教の創始者である道元（どうげん）・親鸞（しんらん）等が貴族階級の、しかも都の出身にあるのに対し、日蓮聖人は唯一東国の出身者だったのです。

ご遊学から立教開宗へ。 そして波乱のご生涯

法華思想史上から日蓮聖人のご誕生を見ますと、「十七条憲法」や「冠位十二階」を制定し、仏教興隆に尽力され、日本における最初の法華経註釈（ちゅうしゃく）家でもある聖徳太子の没後六百年にあたり、また日本最初の法華宗創始者、伝教大師最澄の没後四百年にあたります。

古来より「五百年にして王者興る」という言葉がある通り、まさにこの鎌倉時代こそ、偉大な「法華経的人間」が現れる予感をはらんでいました。日蓮聖人は、まさにそうした時代にお生れになられたのです。

ここではまず、一般的な一宗一派の開祖として、あるいは鎌倉新仏教の名僧の一人として日蓮聖人のご一代を語りましょう。

先述の通り、承久四年二月十六日、今の千葉県小湊の地に漁師の子としてお生

まれになった日蓮聖人は、その後発心（ほっしん）され、十二歳にして地元の清澄寺にご入山、道善房の膝下（しつか）にて名を「善日曆（ぜんにちまろ）」から「薬王曆（やくおうまる）」に改められました。そして十六歳にて出家得度（とくど）されると、「是聖房蓮長（ぜしやうぼうれんちやう）」と名乗られるようになります。蓮長法師は、当時の仏教の大学である比叡山（ひえいざん）を始め、三井の園城寺（おんじやうじ）や、鎌倉等の諸山諸寺をつぶさに遊学研鑽されました。その結果、お釈迦さまの真実の教えは『法華経』にあると確信されるのです。

そして清澄山にお帰りになると、建長五年（一二五二）四月二十八日、旭が森にて開宗の宣言をされ、幕府や民衆に対し生涯をかけて法華経の信仰を提唱されました。特に「四箇格言（しかかくげん）」念仏は極楽往生に非ずして無間地獄の法門、禅は仏心に非ず天魔の法門、真言は鎮護国家の法門に非ず亡国の法門、律は生き仏や聖人の法門に非ず国賊の法

門）」を始めとする痛烈な諸宗批判の結果、時の幕府からもおとがめを受け、二度の流罪と度重なる法難にあわれました。まさにご自身が「大難四ヶ度、小難数知れず」と述べられている通り、波乱のご生涯を送られたのです。

その後、晩年の九ヶ年間を身延山で過ごしになられ、現在の東京大田区にある池上本門寺（ご信者の池上宗仲邸）にて、六十一年のご生涯を閉じられました。

久遠の本仏が したためられた台本とは

しかし、これはあくまで歴史上のご生涯であり、日蓮聖人の法華経信仰から解釈しますと、久遠の存在である本仏のお釈迦さまが法華経に予言された通り、必然的にこの日本にお生まれになったことになりました。すなわち正しい仏法が隠没し、宗教者が自説に固執して争いの絶えない時代、末法・鬪諍堅固といわれるその時代に、生まれるべくしてお生まれに

なられたのです。ですから私たちは、日蓮聖人がこの世に出現されたことを、単に「ご誕生」とは言わず「ご降誕」と申し上げます。

では、なぜそのような解釈ができるのでしょうか。解答は法華経にあります。それでは、法華経を単なる一經典としてではなく、ドラマティックに信仰を介して拝読いたしましょう。

法華経は、お釈迦さまが晩年の八年間をかけて説かれた、全二十八章から成り立つ經典です。そして第一章「序品（じよほん）」から第九章の「授学無学人記品（じゆがくむがくにんぎほん）」までと、第十章の「法師品（ほつしほん）」以降では、まったく趣（おもむき）が違ってまいります。なぜなら「法師品」以降には「於我滅度後（おがめつどこ）」、「如来滅後（にょらいめつどこ）」という経文が、頻繁（ひんぱん）に出てくるからで、これらはお釈迦さまご入滅後という意味の言葉だからです。つまりここでは、お釈迦さまご在世中ではなく、ご入滅なされた以降のことが問

題となっているのです。

さらにそれは、ご入滅以降でも「鬪諍堅固」「白法隱没（びやくほうおんもつ）」、「つまり末法といわれる時代を志向しています。経文には「於後惡世」「於後末世 法欲滅時」「我滅度後 後五百歲中 広宣流布（こうせんるふ）於閻浮提（おえんぶだい）無令断絶（むりょうだんぜつ）」とあり、末法時代に焦点を当てているのは明らかなのです。

経文によりますと、この惡世末法といわれる時代に「法華経を広めよ」というお釈迦さまの要請に対して、大勢の「菩薩」と呼ばれるお弟子の方々が「私たちが誓つてこの法華経を広めます」と、不惜身命（ふしやくしんみょう）の決心をもって誓願（せいがん）されました。ところがお釈迦さまは「止（や）みね、善男子（ぜんなんし）。汝等（なんだち）が此の経を護持（ごじ）せんことを須（もち）いじ」と、にべもなくその誓願を退（しりぞ）けられるのです。

そして「我が娑婆世界（しゃばせかい）に自ら六万恒河沙（ろくまんごうが

しゃ）等の菩薩摩訶薩（ぼさつまかさつ）あり。一一の菩薩に各六万恒河沙の眷属（けんぞく）あり。是の諸人等能（よ）く我が滅後に於て、護持し誦誦（どくじゆ）し広く此の経を説かん」と宣言されました。

こうしてお釈迦さまは、ご自身の滅後、惡世末法に法華経弘通（くつう）の任にあたるのは「本化（ほんげ）の菩薩（ぼさつ）」であると、上行（じょうぎょう）菩薩を代表とする四人の菩薩をはじめ、大勢の菩薩を召し出だされたのです。

さて、この上行菩薩をはじめとする本化の菩薩方は、久遠の存在である本仏に久遠の昔から教えを受けていた、いわば「生え抜きの本弟子」でした。ですから、お釈迦さまの後継者といわれていた弥勒（みろく）菩薩でさえ「我此の衆の中に於て、乃（ない）し一人をも識（し）らず」とおっしゃったのも、無理はありません。皆の目の前におられるお釈迦さまが三十歳で悟りを開かれ、それから弟子入りされた人たちの中には、誰

一人としてこれら本化の菩薩のことを知る者はいなかったのです。

ここで法華經第十六章「如来寿量品（によらいじゅりょうほん）」に明かされる「久遠本仏釈尊（くおんほんぶつ）しゃくそん）」について、少し触れておきましょう。

説法を聞いていたお弟子たちは、今まで目の前におられるお釈迦さまが十九歳でご出家され、三十歳でめでたく悟りを開かれたとばかり思っていました。ところがそれは仮の姿であって、お釈迦さまの本体は「五百億塵点劫（ごひやくおく）じんでんごう）」といわれる遠い過去、始めの無い始め、久遠の昔から仏であった「妙法蓮華經如来」という本仏なのです。そして、この本仏がお釈迦さまという仮の姿をもってインドに出現され、衆生を教化されていたのです。

しかし、本仏が再度この世にお出ましになり、私たち衆生を教化することはありません。筆頭のお弟子である上行菩薩が、悪世末法の世に「全権大使（ぜんけんたいし）」として遣（つか）わされ

るからです。そして、この上行菩薩こそが、日蓮聖人なのです。

本化の菩薩、 その資格と自覚

法華經を拝読しますと、末法に法華經を広める者は難に遇うと説かれていきます。つまり日蓮聖人が遇われた数々の法難は經文に約束されたものであり、必然的であったのです。しかもそれは決して悲観すべきことではなく、ご自身にとつてはむしろ法悦（ほうえつ）でありました。經文に我が身が符合することで、法華經の予言が真実であり、ご自身が久遠本仏より末法に遣わされた上行菩薩である証明となるからです。またその事実には、日蓮聖人が「法華經の行者」であるということ、対外的にも知らしめることになりました。ここに法然・親鸞・道元等他宗の祖師との、隔絶（かくぜつ）の差が明示されると言えます。日蓮聖人は、必然的にこの日本という国に、末法・闘争堅固といわれる時代に、生まれ

るべくしてお生まれになったのです。

日蓮聖人の生涯を通しての言動は、個人的性格により発せられたものでなく、そのすべてが法華經に起因していました。解りやすく譬（たと）えますと、十二歳の出家得度から、六十一歳で身延の生活を終えられ、池上でお亡くなりになる日まで、法華經という台本通りに、本仏と約束された世界を実行されたのです。つまり本仏であるお釈迦さまを、法華經という台本の原作者としたなら、日蓮聖人はこの原作者の心を最も理解していた、名役者と言えるでしょう。

ところで、ご自身が「上行菩薩である」とのご自覚を公表されるのは、佐渡にご流罪となられてからです。しかしご自身の内では、すでに十二歳より三十二歳に至る二十年間の求道研鑽（ぐどうけんさん）の旅にて、確信されておられたと考えられます。そうでなければ、比叡山を出られてから、伊勢神宮にて奏上（そうじょう）された「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」との「三大誓願」

はありえなかったでしょうし、建長五年四月二十八日の立教開宗、お題目始唱はなかったと考えられるからです。

そして、何よりもこの時より、是聖房蓮長から「日蓮」と名を改められました。

「明かなる事日月（にちがつ）にすぎんや、浄（きよ）き事蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華経と名く。日蓮又日月と蓮華との如くなり」

「日蓮とななる事、自解仏乘（じげぶつじょう）とも云ひつべし」

まさに上行菩薩としてのご自覚がなければ、日蓮と名乗ることはできなかったでしょう。こうした自覚の上に立って「一天四海・皆歸妙法」「立正安国」の誓願を持ち、立教開宗を宣言されたのです。

日蓮聖人は「日蓮は何（いずれ）の宗の元祖にもあらず、又末葉（まつよう）にもあらず」とおっしゃいました。一宗一派の開祖として、あるいは鎌倉新仏教の名僧の一人としてではありません。立

教開宗とは、ただ本仏の御心を実現するために表明された、お題目信仰の宣言なのです。

【本化の菩薩が選んだ国と時代 完】

2001.04/28

written by Taiko Murao

produced by NOMA

<http://www.sunlotus.org/>